

高瀬住宅自治会

事業名

高ヶ坂「防災フェスタ」

事業概要

- 在宅避難をテーマに、近隣の自治会や地区町内会連合会と協力して「防災フェスタ」を実施。地震発生時の対応から避難生活、その後の生活再建までの一連の対策について、理解を深めてもらった。
- 大学教授を招き、ミニ講座「迫り来る『首都直下地震』について知ろう!」を開催。大学生のボランティアも参加し、大学との連携につなげた。

実施期間 令和5年6月17日～12月17日
 参加人数 参加者 約200名
 事業総額 約40万1,000円
 (地域の底力発展事業助成金 40万円)

役割分担

《企画・調整(1名)》自治体で防災対策の業務に従事した経験のある自治会員が企画書を作成し、関係機関等と意見調整。
 《参加者募集・開催準備(約10名)》各町会長が参加者を募集。
 《チラシ配布(約15名)》8町会で分担して配布。
 《訓練の運営(約50名)》各町会の会長・副会長、防災部長、消防団が屋外訓練、体育館内での展示説明等を担当。学生ボランティア5名が会場案内などを担当。

主な経費(助成対象)

- 謝礼金 講演謝礼
- 物品購入費 パネル代、事務用品、インクカートリッジ、電池、衛生用品
- 印刷経費 チラシ、展示用パネル
- 役務費 イベント保険料、振込手数料、郵送料、代引手数料
- 委託料 避難生活体験コーナー設置・運営、パンフレット図案制作
- レンタル・リース料 打合せ用会議室使用料

事業の開始から終了までの主な流れ

令和5年
 6月17日 町会長会議にて事業説明し実施を決定
 10月22日 タイムスケジュール、役割分担を確認
 11月18日 チラシ配布及び当日の役割分担最終確認
 12月17日 防災フェスタ実施。終了後に反省会



高ヶ坂小学校体育館内のパネル展示の様子。警察署や消防署などからの説明に聞き入る参加者

在宅避難をテーマに高ヶ坂「防災フェスタ」を実施

災害を「自分ごと」として考えてもらうきっかけに

令和5年12月17日に開催した防災フェスタは、高ヶ坂小学校を会場に、校庭で災害体験、体育館では専門家による講座やパネル展示を実施した。

参加者はまず、起震車による地震体験、救護救出訓練、消火器訓練、屋外トイレの設置訓練などを通し、災害発生時における対応を体験。

続けて、体育館内では、実際に体育館に避難することを想定した避難訓練、在宅避難や避難所生活についての説明やパネル展示などを通し、災害時の対応や平時の備えについて学んだ。

さらに、工学院大学建築学部まちづくり学科の村上教授を招き、ミニ講座を開催。地域防災力を高めるためにできることについての説明を受け、災害に備えて、住民同士はもちろん、町会・自治会間でも連携を深める契機となった。大学生ボランティアは会場案内などを担当。地域住民と交流を深めた。

今回の防災フェスタを企画した自治会員の藤林さんは、「災害を自分ごととして捉え、日頃から備えて欲しい」と説明する。



上は消火体験の様子。左は自治会の協力依頼を受けて今回のフェスタに参加した一般社団法人減災ラボによる試食コーナー。避難生活での食事づくり、食材活用を実演してもらった

事業による 成果・効果

地域で連帯感が深まり、防災意識の向上へ

「私たちの地区では、昔から各自治会が協力して運動会を開催してきました。しかし、住民が高齢化して子供たちが独立し、その開催が難しくなりました。一方で防災が地域にとってより大きな課題となっていて。そこで、運動会を防災フェスタに変更しました」と藤林さんは経緯を語る。

防災フェスタが地域を結び付け、連帯感を深める新たな役割を担っている。参加者には、都や消防庁、警察署が発行する災害対策のリーフレットなどを配布。防災意識をさらに高めてもらった。「災害は待ってくれません。在宅避難をテーマとしたフェスタで、自助の大切さを伝えることができました」と藤林さんは話す。

事業を振り返って

声

遠慮せず行政に相談を

藤林さんは、自身が区役所に勤務して防災を担当した経験を踏まえ、「自治会で防災関連のイベントを考える時には、自治体に声をかけると協力してくれます」と語り、地域のコミュニティが行動を起こすことに期待を示す。「行政に遠慮なく相談すると良い」と説明する藤林さんは、防災フェスタを始めるに当たり、町田市に協力を要請。消防や警察が毎回、積極的に協力してくれている。「工学院大学の村上先生とは区役所で防災を担当していた時に会いました。今回は先生が町田市で活動されていて、市を通して偶然つながりました」とのことだ。



防災フェスタを企画した自治会員の藤林さん